

「未来」はいつ訪れる？

2018年6月に閣議決定された「未来投資戦略2018～「Society 5.0」「データ駆動型社会」への変革～」では、冒頭に記した「基本的な考え方」で、データ覇権主義の世界ではすでに米国、中国が先行独占していることを理解する必要があるとしている。また、我が国は人口減少、高齢化、エネルギー・環境規制などの課題を各国に先んじて直面する「課題先進国」になっている。一方、例えば企業の技術力、大学の研究開発力、高い教育水準の人材、未利用なままのリアルデータなどは、日本が保有する強みはまだ多くあることも事実であり、課題先進国という難局をチャンスと捉え、既存の組織や産業の枠を超えて社会変革を飛躍的に推進すれば、国際社会においても確たる立ち位置を示すことができる、と記している。

この「基本的な考え方」は、「今後、諸外国においても、我が国と同様の社会課題に直面していくこととなり、社会課題解決への技術革新、ソリューション提供競争が想像を超えるスピードで激化していくことに鑑みれば、まさに「この数年」が我が国にとって不可逆的岐路であり、新たな決意とスピード感をもって進めていく」と結ばれている。我が国は「この数年」を過ごし、不可逆的帰路を通り過ぎて2022年を迎えているわけであるが、いま、日本はどのような立ち位置に居るのだろうか？(https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/miraitousi2018_zentai.pdf)

さて、「未来投資戦略2018」が公表された翌年となる2019年は、中国で初めて確認された新型コロナウイルス感染症（COVID-19）により、

世界の様相が大きく変わる契機となったが、これと並行する形で、我が国はカーボンニュートラルという大きな未来への変化に向かってスタートを切った年でもある。この流れは、2020年10月の菅義偉前首相による「2050年カーボンニュートラル」の宣言を経て、同年12月に経済産業省より「2050年カーボンニュートラルに伴うグリーン成長戦略」として示された(https://www.meti.go.jp/policy/energy_environment/global_warming/ggs/index.html)。

また、2019年には、科学技術の領域でも「ムーンショット型研究開発制度」という事業がスタートした。これは、我が国発の破壊的イノベーションの創出を目指し、従来技術の延長にない、より大胆な発想に基づく挑戦的な研究開発（ムーンショット）を推進する新たな事業であり、建設分野については「2040年までに建設工事は完全無人化」という目標が設定されたが、これを達成するために、多くの研究者、技術者らが精力的に取り組んでいる(https://www8.cao.go.jp/cstp/moonshot/index.html)。

年代がやや前後するが、国連主導で2015年からスタートしたSDGsが17の課題を解決する目標と定めているのは2030年である(https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html)。また、国土交通省が笹子トンネルの天井版崩落事故を契機として2013年を「社会資本メンテナンス元年」とし、i-Constructionを契機として2016年を「生産性革命元年」とした。なお、「〇〇元年」としては定められていないが、2021年は国土交通DX推進



東北大学大学院 工学研究科 教授
同インフラ・マネジメント研究センター センター長

ひさだ まこと
久田 真

室が設けられ、この方面での様々な取り組みが進められたことから、いわば「国土交通DX元年」とでも呼ぶべき年であったと思う。

更に遡ってみると…1966年に放映されたウルトラQ「2020年の挑戦」では、発達した医療により高度な知能や長寿を得たものの、健全な肉体の維持には限界のあるケムール人が、2020年の世界から当時の東京に現れ、人々を連れ去っていった (<https://ja.wikipedia.org/wiki/ウルトラQ>)。また、ジョージ・オーウェルが全体主義的なディストピア（反理想郷あるいは暗黒社会）を描いた「1984年」を書き終えたのは1949年であった ([https://ja.wikipedia.org/wiki/1984年_\(小説\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/1984年_(小説)))。さらに、ゼネラルモーターズ（米国）がフューチャラマ（Futurama）として未来都市をディスプレイで表現したのが『明日の世界』（World of Tomorrow）というテーマを掲げて1939～1940年にかけて開催されたニューヨーク万国博覧会でのこと (<https://ja.wikipedia.org/wiki/フューチャラマ>) で、1999年に恐怖の大王の襲来を予言したノストラダムスが予言集を書き留めたのが16世紀であった (<https://ja.wikipedia.org/wiki/ミシェル・ノストラダムス師の予言集>)。

さて、今回、巻頭言の執筆の機会を得たので、「未来」をキーワードに、それぞれの時代で、当時の人々が、どのような「未来」を描いてきたの

かを調べてみた。最後に「未来」そのものを調べてみたが、以下の通りであった。未来（みらい）とは、時間の中で現在の後に来るものであり、時間や物理法則が存在する限り未来の到来は避けられないものとされる (<https://ja.wikipedia.org/wiki/未来>)。

ということで、未来とは不可避的に到来するものであり、「いつ訪れるか？」を待望するよりも「どのような未来を描き、それに向かって何をなすべきか？」が重要であるようだ。



2000年のパリの人々がオペラを後にして空中旅行をするという未来予想図。アルベール・ロビダ、1902年頃 (<https://ja.wikipedia.org/wiki/未来> より)。

【著者紹介】久田 真（ひさだ まこと）

1990年京都大学工学部交通土木工学科を卒業後、東京工業大学・助手、新潟大学・助教授、(独) 土木研究所・主任研究員を経て2009年より現職。2014年に同大・工学研究科に設置されたインフラ・マネジメント研究センターのセンター長に就任。